

資料

パリ在住邦人家庭の障害乳幼児親子の子育ての実態と
支援課題に関する探索的研究

田尻 由起*・柘植 雅義**

パリ在住邦人家庭の障害乳幼児の子育ての実態と支援課題を明らかにするために、6名の母親に対し半構造化面接を行った。インタビューを分析した結果、【フランスでの子育てに関する肯定的な捉え】、【フランスでの子育てに対する不安・戸惑い・困り感】、【言語・文化的障壁による情報収集・利用の制限】、【パリに住む邦人家庭障害乳幼児親子の子育て支援ニーズ】の4つのカテゴリーが示された。母親はパリでの子育てを肯定的に捉えつつも子育てに関する社会的資源については不安や戸惑いを感じていた。また支援ニーズとして言語的な支援の必要性、日本の医療や子育てに関する情報提供、発達に関する日本人専門家の存在が挙げられた。特に在留邦人であるが故の支援の脆弱さが、子育て困難さを増幅させ、邦人同士がつながりを持つための場と機会の提供は重要課題であった。今後は子育てに関する情報を発信しつつ、日系関連機関と連携しながら子育てを支援するシステム作りが必要である。

キー・ワード：在留邦人家庭 子育て支援 家庭支援 障害乳幼児 メンタルヘルス

I. 問題と目的

海外在留邦人数は増加の一途をたどっている。令和元年の在留邦人は140万人に迫り（外務省, 2019）、それに伴い海外に在留する子どもたちも増加傾向にある。一般社団法人日本在外企業協会が2020年に発表した『『海外・帰国子女教育に関するアンケート』調査結果(2019)』によると、家族帯同者数の年代別構成では30代と40代の子育て世代が全体の約8割を占めている。また帯同海外子女は就学前の乳幼児が2011年の約40%から2017年では約45%と急増している。しかし在留邦人家庭の子育てへの日本からの支援は行き届いておらず、特に障害乳幼児親子への支援は、ニーズが高いことが予想される。

国内では小児の疾病や障害のスクリーニング、またその後の支援の契機として、乳幼児健康診査（以下、健診）が重要な役割を果たしており、発達障害者支援法では、母子保健法に則った健診を実施し、発達障害の早期発見に努め（第5条）、彼らへの早期からの支援が示されている（第6条）。しかしこれらを享受できない海外在留邦人の乳幼児親子も多くいる。一方で現地の資源を利用することも検討できるが、その実際は容易なものではない。この点についてニューヨークで育児支援グループを運営する関（2018）は、標準的な母親の役割、親子関係には文化的な違いがあることを指摘し、小野（2018）は情報が豊富な地域であっても、現地の文化に完全に溶け込めるわけでもなく、日本的な考え方や習慣を持ち続けていることが多いと述べている。つまり、日本人子女の特性や日本の子育て文化を知らない海外の医療機関へ

* 筑波大学大学院人間総合科学研究科

** 筑波大学人間系

の受診や相談機関への相談に不安を抱き、支援につながらない可能性も考えられる。そこで広瀬（2010）は、海外でできることは限られていることを前提としたうえで、海外での支援体制の構築に向けて、「現地での支援」「現地への支援」の必要性を訴えている。

「現地での支援」について、在外邦人家庭の障害乳幼児親子の現状と課題はこれまでの研究から3点で整理される。第一に「サービスへのアクセス、利用への障壁」である（門松，2014；小野，2018；関，2018；田尻，2014；竹田・嶋崎・鈴木・工藤，2010；滝坂，2006；鳥海，2013）。これは、海外の支援を利用するための言語的な課題や子育て、医療、教育等の文化が異なることにより、支援へのアクセスに障壁がある、ということである。この背景には、言語的なハードル、および文化的なハードルの2側面があるが、例えば言語的障壁について、在留邦人のメンタルヘルス研究をしている秋山（1998）は、異文化生活の中で最も大きなストレス要因は言語的な障壁による孤立状態であること、またある程度会話ができる場合でも、「本当にこころが通じ合わない」と感じる事が多く、言語的障壁は渡航後の時間経過に関わらずストレスであると述べ、滝坂（2006）は「現地資源をいかに活用するかは非常に重要であるが、言語や社会習慣の違いによるコミュニケーションの困難からそれが必ずしも容易ではない」と述べており、2点を切り離して考えることは難しい。

またこの点については諸外国における移民世帯の障害乳幼児親子についても同様の状況を伺うことができる。Khanlou, Haque, Mustafa, Vazquez, Mantini, and Weiss（2017）は、21名のカナダの移民障害乳幼児親子について研究し、彼らは文化的背景の違いなどから、個人レベルでもコミュニティレベルでも支援へのアクセス障壁に直面していたといい、Su, Khanlou, and Mustafa（2018）は、在米中国人の障害児の母親14名に対してインタビュー調査を行った結果、サービス利用自体を支援しなければならない状況であり、母親へのヘルスケア、学校や支援システム

へのアクセスとその使用に関するサポート、母親に対して適切な社会的支援の提供等を推奨している。

第二に「多言語環境による言語発達を含む、子どもの発達の遅れへの気づきにくさ」である（バーンズ・亀山・森，2010；門松，2014；竹田ら，2010；坪井，2003）。竹田ら（2010）は、海外邦人子女の発達障害が見逃される要因の一つとして「発達障害を視野に入れたスクリーニングを受ける機会がない、もしくは少ない」、「言葉の遅れに気づきにくい外国語環境で教育を受けている」ことを含めた8点を挙げている。またニューヨークでの邦人子弟の支援事例からバーンズ・亀山・森（2010）は、バイリンガル環境では言葉が遅れて当たり前という俗説や母親たちが互いにそう言って納得し、その発見も対応も遅れがちであることを指摘している。

第三は日本人家庭の障害乳幼児親子への支援体制の未確立」（広瀬，2010；広瀬，2013；諏訪・阿部・櫻木・松井，2010；坪井，2003）である。現在は地域の事例研究を積み上げ段階であり、支援体制を確立させるまでには至っていない。諏訪ら（2010）は、在留邦人は日本では当たり前利用できるサポートを海外で得ることが難しく、障害のある子どもの家族は手探りの状況であることを示している。これに対し広瀬（2010）は世界各地の邦人居住の都市で発達障害の実態を調査し、対応を考えていく必要があると述べている。

つまり在留邦人の障害乳幼児親子は、日本のように早期発見から早期支援、早期介入が困難な状況、環境であり、早期から継続的に支援する体制が確立していない状況にある。さらに在留邦人の障害乳幼児親子の支援に対する学術的な研究自体が乏しいのが現状である。

フランスに住む日本人は現在44261人（平成30年度）で増加傾向にある。パリでは発達障害児とその家族を支援する、国に登録された日系団体が2011年に発足し、その団体が在仏日本人会と連携し「子供発達相談」を実施し、また日系療育グループを運営している。ヨーロッパ

全体で見ると稀有な存在であり、在留邦人の多い隣国の在英日本人会やドイツ各地域の日本人会では行われていない。さらにパリには日本人精神科医が在留していることで、長くヨーロッパの日本人メンタルヘルスの中心地となってきた。そのため発達障害とはじめとする様々な心理・発達面のサポートを求め、相談がヨーロッパ中から集中している現状がある。

また日本からの支援（「現地への支援」）については、実際は一助にはなり得るが、現地での継続支援へ必ずしも繋がらない、という課題がある。それはフランスの支援システムについて、日本から来た専門家が必ずしも精通しているわけではないことに起因する。このことから現地で乳幼児期から邦人家庭の子育て文化に寄り添いながら支援ニーズを捉え、早期から持続可能な支援を計画的に実施することは課題である。

そこで本研究では、在留邦人家庭に着目し、特にパリ地域の邦人家庭の障害乳幼児親子への早期からの継続した支援体制を検討するにあたり、その前提としてパリ在住の邦人家庭の障害乳幼児親子の子育ての実態を保護者に対するインタビューを通して明らかにし、その支援課題について検討することを目的とする。

なお本研究で扱う用語の定義を以下に示す。在留邦人家庭は、外務省の在留邦人の定義を参考とし、両親またはどちらか一方が日本国籍保持者の場合とする。また本研究では、パリを含むパリ近郊地域をあわせて「パリ」と呼ぶこととする。

II. 方法

1. 対象

乳幼児期に知的障害または発達障害の診断を受けた、または発達のニーズを持つ乳幼児の保護者であり、パリにて子育てを経験した（している）母親6名を対象としたインタビュー調査を実施した。対象者の内訳はTable 1に示す。対象者の選定については、筆者が以前パリにて行った子育て講座や邦人健康講座の参加者、日系の障害児支援団体に声をかけ協力者を募り、

協力を得られた保護者とした。

2. インタビュー手続き

2019年9月から2020年2月までの間に対象者へ個別に半構造化面接を行った。インタビュー場所は対象者の希望により決定した。インタビュー内容は、家族構成や滞在の状況、渡仏理由、在仏年数、家族の国籍のほか、在日外国人の母親に対する子育て支援に関する調査を実施した武田（2007）（以下①～④）、またカナダケベック州における移民障害乳幼児親子への支援ニーズについて研究をしたBétrisey, Tetreault, Pierart, and Desmarais（2015）（以下⑤、⑥）を参考に6項目を作成した。その内容は乳幼児期の子育てについて、①フランスでの子育てで、どのようなことが大変か、②子育てについて誰かからのサポートを得たり、サービスを利用したりしているか、③どのようなサービスや情報があったらよいか、④フランスの子育てで感じた点（ポジティブな点、ネガティブな点など）、⑤どのような子どもへの支援ニーズがあるか、⑥どのような保護者への支援ニーズがあるか、である。なおインタビュー中に、対象者が話に詰まる場合は促す声かけ、発話の内容があいまいな場合には、どのような意味かを問う質問を行った。発話内容は対象者の了解を得て、ICレコーダーに記録し、匿名化をしたうえで全発話を逐語化した。

3. 本研究における分析の手順

本研究は佐藤（2008）の質的データ分析法を採用し分析を行った。その手順をTable 2に示す。第一に、音声データを逐語化し（STEP0）、「パリに住む邦人家庭の障害乳幼児親子の子育ての実態と支援課題」のテーマに沿った発言について、セグメントとして抜き出し、1つのセグメントごとに逐語の説明を作成する（STEP1）。第二に、各セグメントの内容をオープン・コーディングすることによって、抽象的な概念に置き換えた（STEP2）。その際、複数の概念の存在するセグメントについては、複数のコードに置き換えた。その後、オープン・コーディングが終了した文字テキストに対して、焦点的コー

Table 1 インタビュー対象者

対象者No	パートナーの国籍	対象者のフランス滞在年数	インタビュー時の子どもの年齢	子どもの発達のニーズ
1	仏	10年以上	15歳, 12歳, 10歳	知的障害を伴うASD
2	仏	5年から10年	10歳, 10歳(双子)	知的障害を伴うAHDH
3	仏	5年から10年	5歳, 4歳	発達障害(疑い)
4	米	10年以上	3歳	知的障害(疑い)
5	日	5年から10年	10歳, 2歳	知的障害を伴うASD
6	日	5年未満	5歳, 3歳	知的障害を伴うASD

注. アンダーバーは発達のニーズを持つ子ども

Table 2 分析の手順

STEP	分析	手続き
0	データの整理及び逐語録の作成	録音データを逐語化
1	セグメント化	分析テーマに沿った意味のあるまとまりで区切り, 説明文を作成
2	オープン・コーディング	各セグメント内容をオープン・コード化し, 抽象的概念へ変換
3	焦点化コーディング	STEP2より, より抽象的な概念への変換
4	概念カテゴリー(中カテゴリー)の生成	類似する焦点的コードをまとめ, 大カテゴリーの生成と定義づけ
5	概念カテゴリー(小カテゴリー)の生成	焦点的コードと大カテゴリーの中間的カテゴリーの生成と定義づけ
6	共同研究者およびフランスにて都市社会学を学ぶ日本人大学院生による確認	分析手順の再確認, およびコーディング, カテゴリー化の過程, 定義づけの見直し
7	大カテゴリーの生成	大カテゴリーをさらに集約するカテゴリーの生成と定義づけ
8	大カテゴリーの修正	STEP6.7を踏まえ, 最終的なカテゴリーの作成

ディングを行い、より抽象的な概念に置き換えた(STEP3)。第三に、類似する焦点的コードをまとめて中カテゴリーを生成し、定義づけを行った(STEP4)。その後、焦点的コードと中カテゴリーを結びつけるような中間的カテゴリー(小カテゴリー)を作成し定義づけを行った(STEP5)。なお本研究では、記述量は分析の対象とせず、また焦点化コーディングした際に、同一人物のいくつかの語りから、同一のコーディングがされた場合は、それぞれについて分析の対象とした。さらにSTEP6にて、障害科学を専門とする大学教員(共同研究者)1名、およびフランスの大学にて都市社会学を研究している大学院生1名より、分析手順や概念形成、カテゴリーの分類とその命名について、確認作業を依頼した。検討事項として、「フランス」、「パリ」という言葉の使い分けの明確化について指摘された。そのため保護者の語りの内容から、国の制度、システム、言語、文化等の内容に関しては「フランス」を使用し、生活環境や具体的な支援等については、居住している地域

である「パリ」を使用した。また、中カテゴリーをさらにまとめるカテゴリーの必要性を確認し、中カテゴリーを集約するような、大カテゴリーを作成し、定義づけを行った(STEP7)。STEP6、7を踏まえ、最終的な概念形成を行った(STEP8)。

4. 本研究の倫理的配慮

本研究は、筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を得て実施した。インタビュー対象者については、口頭および紙面にて研究の概要、インタビューの主旨を説明し、同意を得て実施した。

III. 結果と考察

逐語録から83のセグメントが抽出され、分析の結果、4つの大カテゴリー、9つの中カテゴリー、22の小カテゴリーが生成された。最終的な分析結果はTable 3に示す。大カテゴリーは【フランスでの子育てに関する肯定的な捉え】、【フランスでの子育てに対する不安・戸惑い・困り感】、【言語・文化的障壁および情報収集・利用の制限】、【パリに住む邦人家庭の障害

Table 3 在パリ邦人障害乳幼児家庭の子育てに関する語りに関するカテゴリー分析

大カテゴリー名	中カテゴリー名	小カテゴリー名	焦点コード	
フランスでの子育てに関する肯定的な捉え	フランスの子育てしやすい文化と環境	フランスの伝統的な子育て文化への肯定的な捉え	フランスの「親」であっても個人を尊重する文化 日本ほど便利ではないハード面をソフト面でカバーできる フランスの子育てに対するあたたかさ 両親で育児をする文化 フランスの子育てしやすさ・手厚さ	
		子育てのサポートやサービス利用に対するストレスの小ささと手厚さ	ベビーシッター利用のハードルの低さ フランスの保育・教育の保護者ストレスのなさ フランスの子育て支援の手厚さ	
		PMIやsage-femmeの利用	子どもの発達・健康管理についてはPMIの利用 産後のsage-femme（助産師）の利用	
		日仏託児所の利用	日系・現地ともに託児所の利用	
		フランスの公的な補助の利用	公的な補助による支援を得た	
	フランスでの子育てに対する不安・戸惑い・困り感	現地資源の利用	日仏の保育、教育システム・文化の違いによる不安や不満	日仏の保育・教育システム、文化の違いによる不安や不満
			家庭内の日仏子育て文化の相違へのネガティブな感情	家庭内の子育て文化の相違
			フランス医療や健康管理への不満や不安	フランス医療・健康管理システムの不便さ 医療に対する不安
			フランス社会システムへの不満	フランス社会システムへの不満
			駐在であるため、公的な補助を得られない	駐在であるため、公的な補助を得られない
パリでの子育ての困り感		フランスでの子育て支援者の不在	駐在は一人で子育てを頑張ることが多い 子育てを親族に頼ることができない	
		邦人子女の発達への不安	日仏での子どもの発達への捉え方の違いへのストレス 子どもの発達への不安	
		子育て支援の地域差	支援の地域差	
		言語的障壁	言葉の壁 自身の言葉の問題	
		言語的・文化的障壁による情報収集・利用の制限	言語的・文化的背景による情報収集と利用の制限 他言語・異文化による情報収集能力の低下と情報収集の煩雑さ 海外在住による情報収集能力の低下 情報収集の煩雑さ 他言語・異文化の背景から情報をうまく利用できない 資源・支援をうまく利用できない	
パリに住む邦人家庭障害乳幼児親子の子育て支援ニーズ	日本語の医療・子育てに関する情報の必要性	子どもの健康管理や親の妊娠から出産までの日本語による情報の必要性	子どもの健康管理や手続きの情報の必要性 妊娠から出産、育児に関する日本語の情報の必要性	
		日本人同士の交流の場の必要性	日本人同士の親の交流の場の必要性	
	障害乳幼児の保護者への支援ニーズ	日本人の互助システムの必要性	互助システムの必要性	
		障害乳幼児の保護者への支援の必要性	支援ニーズのある子どもの保護者の支援の必要性 母親へのレスパイト	
	障害乳幼児への支援ニーズ	子どもの発達に関する日本人専門家の必要性	発達支援の日本人専門家の必要性	
		障害乳幼児の余暇活動の場の必要性	支援ニーズを持つ子どもたちの余暇活動の場の必要性	

乳幼児の保護者の子育て支援ニーズ】の4つから構成される。以下、大カテゴリーを【】、中カテゴリーを『』にて示し、大カテゴリー毎に結果および考察を示す。また、保護者の語りについては斜体にて示すが、個人が特定されないよう配慮した。

1. 【フランスでの子育てに関する肯定的な捉え】

この大カテゴリーは、『フランスの子育てしやすい文化と環境』と『現地資源の利用』とい

う2つの中カテゴリーから構成されている。

『フランスの子育てしやすい文化と環境』は、フランスの個人を尊重する文化や支援の手厚さ、ベビーシッターのハードルの低さなど、一般的な子育てに関する文化や環境への肯定的な意見についての語りである。以下、象徴的な保護者の語りを示す。

こっちは、もう子ども歓迎みたいな、(中略)まあエレベーターはそんなにないですけど、助けてくれたり、お店に子どもが入ると嫌な顔を

するとか全くないですし、出かけやすいなどは
思います。日本だったらどうしようかと。レス
トランなんて入れないですし。(対象者No.6)

パリに住む邦人障害乳幼児の親子の子育ての
実態としては、保護者自身が子育てするうえで
感じるフランス社会や文化、環境に対する肯定
的な捉えに支えられ、障害のある乳幼児のパリ
での子育て自体も、肯定的に捉えていたよう
であった。また子育てに関するハード面(道や公
共交通機関の整備等)は日本のほうがより整備
されている一方で、フランスのそれをカバーで
きるソフト面(見守り、助け合う文化)の充実
を感じ、パリでの子育てを肯定的に捉えること
に影響を与えていた。

『フランスの現地資源の利用』では、医療、
保育・教育機関、公的補助の3点が主な利用資
源であった。医療に関しては、小児科での子ども
の健康管理のみならず現地の母子センター
(La protection maternelle et infantile : PMI) や
Sage-femme(助産師)の活用を通して、保護者
と子どもの心身の健康管理、および子どもの発
達の確認を行っていた。託児所については現地
託児所とともに、日系の託児所や幼稚園も子育
てを支える資源の一つとして機能していた。先
行研究ではこれまで、支援体制が未確立である
ために支援が行き届いていない状況があるとの
ことであったが、必要に応じて現地の利用でき
る基本的な子育てに関する社会的資源の利用を
確認することができた。

本大カテゴリーにおける在パリ邦人家庭の障
害乳幼児親子への支援課題として、保護者自身
がホスト国(居住国)の子育ての文化や環境に
対しての保護者の捉え、さらに一般的な出産か
ら子どもの就園、就学までの支援や子どもの教
育等の社会的資源について、現地または日系の
ものにアクセスできているか否かの確認の重要
性が示された。この視点は在パリ邦人家庭の障
害乳幼児親子を支援する上での重要な視点であり、
これらを抜きにして支援を検討することは非
常に困難である。

2. 【フランスでの子育てに対する不安・戸 惑い・困り感】

この大カテゴリーは『フランスの社会システ
ム・文化的相違への不安・戸惑い』、『パリで
の子育ての困り感』の2つの中カテゴリーから構
成される。

パリでの子育てで直面する『フランスの社会
システム・文化的相違への不安・戸惑い』では、
日仏の保育・教育文化の違いによる不安や不満、
医療・健康管理システムへの不便さなどであ
った。

子どもが熱出したとか言っても、(中略)
Pédiatre(小児科)が全部RDV(予約)制。だ
からすぐにとれるとは限らないでしょ。電話し
たら処置の仕方を教えてくれたりとかはあるけ
ど、日本みたいになんか、行って2時間待つて
でも診てもらおうというのではないので、そう
いう時は救急に行かないといけないから…。(対
象者No.1)

両親の負担にならないようなのは、本当に持
ち物とかはCrèche(託児所)・幼稚園なんかは
ほとんどゼロに近いんで…(中略)でも何の義
務もほとんどないから。(中略)ちょっと寂しい
というか…。(対象者No.4)

このようなシステムや文化の違いに対するネ
ガティブな感情というのは、保護者自身のパリ
での生活や文化的適応という視点ではなく、子
どもの生活や育児・教育環境を整える、という
視点で見た文化的相違に対する感情であった。

また『パリでの子育ての困り感』では、保護
者自身の親族が遠方のため親族からサポートを
得られないこと、支援の地域差についての困り
感、また妊娠から出産、その後の育児について、
フランスでの一般的な子育てに関する知識を参
考にしながら、しかし邦人子女の発達に関する
情報の不足やそれらを相談できる場所の不足に
より、不安や困り感がある、ということであ
った。

私が病気をしたんですけど、(夫が)数日休ん
でくれたんですけど、最後の方は出社しなければ
ならなくて、(中略)耳鼻科に行かなきゃい

けなかったんですよ。歩いて行かなきゃいけない。でももう(子どもが)泣いちゃったりするし、結構きつかったんですよ。(対象者No.5)

さらに小カテゴリーの子どもの発達への不安について、保護者からこのような語りが得られている。

娘の発達に少し不安があって(中略)、(自分の子どもが)2歳の赤ちゃんみたいなところが日々のストレス。やっぱり外国にいて、そういう言葉とかストレスはもちろん(ある)。やっぱりフランス人のママたちのしゃべっている輪の中に入れないんですね。(対象者No.4)

自らの親類も近くにおらず、サポート体制が脆弱の中、また言語も文化も違う環境の中、子育てへの支援の不足や自身の子どもの発達について考えること自体、保護者にとっては心理的負担となっていた。つまり在パリ邦人家庭の障害乳幼児の保護者への支援は、日本語の情報や日本人専門家から、気軽に助言も得られる場、機会の提供が少ないことが課題として挙げられる。

また子育てで感じるネガティブな感情の一部は「既知の文化との相違」から派生しているようであった。今回、インタビュー依頼の際に筆者は「日本のことを知りませんかいいですか」という質問を何度か受けた。「知らない」と断りを入れつつ、既知の子育て文化や環境と無意識的に比較し、そこに相違を見出して不安、不満、心配といった感情を持つようであった。関ら(2018)は日本語による正しい情報を提供することで、海外の子育てを日本的な考え方の違いを受け入れ異国での生活に適應できるように支援している、と述べている。つまりフランスで置かれている状況を否定するのではなく、日仏の子育てに関する多様な情報や支援の相違点を認識し整理するための支援を行い、必要に応じた日仏両方の情報を届けることが重要である。その際に前大カテゴリーの「フランスでの子育てに関する肯定的な捉え」と「子どもの成長を願う気持ち」は両面的であり、別次元で捉

えるべき課題であることを前提とすることもまた、支援するうえでの重要な視点である。

3.【言語・文化的障壁による情報収集・利用の制限】

この項目は先行研究で障害乳幼児親子への支援課題として挙げられている「サービスの利用と情報アクセスの制限」や、秋山(1998)の示す「言語面の障壁」に相当する。本研究ではその内容を「言語的障壁」「言語的・文化的背景による情報の収集と利用の制限」と整理した。

「言語的障壁」については先行研究同様、滞在期間や本人の言語能力(現地での生活に不自由しない程度の現地言語の習得)とは関係なく、言語の壁を感じていた語りである。

ものすごくフランス語は勉強したので、(中略)それでもやっぱりすごく繊細な言葉遣いだったりとか、そういうのはやっぱり届かない。(対象者No.3)

言語の違いがあって、私の視点で話したことを基に判断するから、それって歪むじゃないですか。(対象者No.5)

このように子どもの発達についての微妙なニュアンスの伝わらないことへの不自由さや不安は、対象者No.3のように10年以上滞在していても感じるようであった。

また「言語的・文化的背景による情報の収集と利用の制限」は、「情報収集制限」と「情報利用制限」の二点に分類された。つまり言語的障壁に必要な情報を得られないことや情報の煩雑さ等により情報収集に制限がかかることと、そこで得られた情報を実際に活用し、支援を利用することには別の困難さがあり、その困難さも言語的な背景による困難さのみでなく、文化的な背景によるサービス利用の困難さも伺えた。

(障害児者に関する新しい法律やそれに基づくサービスについて)なんかニュースとかでも言っているのかもしれないけど、そんなの1回聞き逃したら終わりだし、情報を自分から探さないと援助は受けられないというのは確かです。(対象者No.1)

多分サービスはあったと思う。(中略) けど私は言葉の問題で使えなかったです。(サービスを利用してサービス提供者が) 来てくれるストレスを考えると一人で自由にやっているほうが楽だった。来てくれる人がフランス人だからめんどくさいなと思って。(中略) すごい日本と比べて色んな支援があるじゃないですか、Nounou (ベビーシッター) さんとかAssistant Maternelle (保育ママ) とか、自分が子ども連れていて(その人たちを見ていると) 結構雑。落ちたものを拾ってあげたりとか平気だし。ああいうのを見てると別にいいかな、幼稚園からでもいいかな。(対象者No.2)

以上から、保護者の言語習得レベルに関係なく感じる言語的障壁に対して支援が必要であること、また情報収集およびその利用に関する言語的な支援が必要であることと同時に、文化的な差異(障壁)に対する支援者側の理解も必要であることが示唆された。さらに実際の利用に至らない原因として前大カテゴリーの【フランスでの子育てに対する不安・戸惑い・困り感】についても配慮しながら支援する必要がある。言語的障壁やそれに派生する情報収集や利用の制限、文化的障壁については、切り離して考えることは困難であり、在パリ邦人家庭の障害乳幼児の子育てに対する支持的支援体制を整え、日本人の子育て文化や障害乳幼児に精通した通訳等の確保は大きな課題である。

4. 【パリに住む邦人家庭の障害乳幼児の保護者の子育て支援ニーズ】

この大カテゴリーはパリに住む邦人家庭の障害乳幼児の保護者の支援ニーズについて語られた部分であり、『日本語の医療・子育てに関する情報の必要性』、『障害乳幼児の保護者への支援ニーズ』、『障害乳幼児への支援ニーズ』の3つの中カテゴリーから構成された。

『日本語の医療・子育てに関する情報の必要性』については、子どもの障害にかかわらず、出産を含む医療、子育てに関する在パリ邦人家庭のための日本語による正しい情報の発信へのニーズであった。

妊娠の時sage femme (助産師) の講習があるっているんだけど、全部口で言うから私が必死にメモして(中略)。日本だったらプリントが配られて、それを見ながらこう説明とかをするのかな。(中略) 日本語でそういう誰かなんかサイトを作ってくれるといいんですけど、そこまではね、色々と変更もあるし、難しいですよ。(対象者No.4)

現代の情報社会では、日本人のための情報は紙ベースからインターネット等による情報まで多種多様である。また最近ではSNS等を利用した個人の発信も多い。しかしこれらは散発的な発信であったり、最新情報でなかったり、時にその信ぴょう性が問題視されることもある。そこで信頼できる日本語による子育てに関するまとまった情報の発信は、パリ在住邦人の子育て家庭に対する支援としては有用であると考えられる。

また、『障害乳幼児の保護者への支援ニーズ』については、保護者への直接支援ではなく、情報交換や互助のシステムといった障害乳幼児親子にとって安心出来たり、息抜きが出来たり、話を聞いてもらったり、といった保護者に寄り添うような支援が求められていた。

だれか人がいてくれるのですごい助かったりする。そう、私にはね。で夫は夫でフランスのこと、で、例えば夫が探しきれないことを、友人が知っている、日本語でもフランス語でも。何か誰かとつながっていることがなんかすごい大切になって。だからやってこれたんだと思う。(対象者No.2)

鳥海(2013)は邦人障害乳幼児親子が早期に適切で専門的な支援につながる要因として、現地邦人専門職や邦人サポートグループの存在が大きな役割を果たしていると述べている。つまり保護者の文化的・言語的背景を共にする者同士、誰かと誰かがつながっている、孤立しない、支え合いの場や機会の提供と、そこでの情報共有や互助の考え方等が重要であると考えられる。

中カテゴリーの『障害乳幼児への支援ニーズ』

内の小カテゴリー「子どもの発達に関する日本人専門家の必要性」は、これまでの先行研究からも示されている。例えば、鳥海（2005）が、ニューヨークに住む邦人発達障害幼児がサービス利用に至る要因について、日系幼稚園や日本人専門職などの存在が大きいことを示し、関（2018）が、標準的な母親の役割、親子関係には文化的な違いがあることを示したように、子に障害があったとしても保護者と同じ文化的、言語的背景を持ちつつ、現地にも精通している専門家とのつながりは重要である。

結局ここ（現地療育機関の利用）で悩んでいる頃に、待っているときに、日本人会の発達（相談会）やってて行ってみたんですね。（対象者No.5）

（困った時の）助けの程度にも寄りますけど（中略）、フランスの日系療育機関の代表の方に聞くとかしか考えられないです。（対象者No.4）

今回のインタビュー対象者は1名を除き、現地の専門機関につながっていたが、日本人の専門家からの並行支援を受けることにより、現地の支援で満たされない支援ニーズや困り感の解消、保護者自身の子どもの障害や支援への理解に役立っているようであった。

また障害乳幼児の余暇活動の場としては、フランスではVacances scolaires（長期休暇、中期休暇）には、いわゆる学童保育（Centre de loisirs）のようなシステムがある。しかし障害乳幼児はこれらを利用することが難しい。

Centre de loisirとかそこがネックで。（中略）なんかちょっとそういう発達に遅れがある子どものcentre（de loisir）とかなないのかなって。（対象者No.3）

バレエは姉はもうフルで毎日、やっぱり発達が遅れている子だと（中略）、もう全部断られてるんです。そういう子が行ける音楽教室とか運動でもあるといいなと思います。（対象者No.6）

好きなことをもっと、例えば彼はロボットが好き、とか何かを作ることが好き、絵とかではないんです。（中略）でもそういうのって誰も

やってくれないんです。なんかそういうのがあるればいいなと思います。（対象者No.2）

フランスのいわゆる療育は、専門家による「機能訓練」や「職業訓練」が主流であり、日本のような「好きなことの追求」や「習い事」、「余暇を楽しむ」というような支援はあまりない。また保護者自身のフランス語力に加え、特に子どものフランス語力や言語発達に心配がある場合は、積極的にフランスの資源を利用することを躊躇したり、サービス自体を探していないなかったり、もしくは探すこと自体が出来ていない可能性は否めない。そのため、日系の余暇活動やデイサービスのような活動は、障害乳幼児への直接的な支援として、そのニーズが高いことは容易に推測できる。

つまりパリに住む邦人家庭の障害乳幼児親子の支援ニーズを満たすためには、保護者と文化的・言語背景をともにする仲間および日本人専門家とのつながりが重要な視点の一つである。また余暇活動等、子どもたちへの直接的な支援は、現在ある日系のいわゆる習い事のような余暇活動を実施する団体へ、障害理解のための啓もう活動、障害乳幼児の受け入れを交渉や現地支援の利用のための支援を行うこともまた、支援課題の1つであった。

IV. おわりに

本研究では、パリ在住邦人家庭の障害乳幼児親子の実態および、より最適な支援を目指す際の支援課題を検討してきた。パリに住む邦人の障害乳幼児親子は、フランス、パリの子育てに対する比較的寛容な文化の中でそれらを肯定的に受け止めながら、また出産から子育て、医療、教育、福祉等に関する基本的な社会資源を利用しながら、子育てに向き合っている状況であった。

一方で、妊娠から出産、その後の子育ての中で、保護者自身が比較的肯定的に受け入れているフランス社会であったとしても、障害乳幼児の子育てには、不安や心配、困り感を感じるようであった。その背景の一つに、邦人家庭の障

害乳幼児親子を取り巻く支援の脆弱さが挙げられる。それは国内のいわゆる一般的な子育てに関する支援の脆弱さや、子どもの障害に対する支援という側面に加え、在留邦人であるがゆえの脆弱さである。例えば親族からの支援や日本からの支援を望めないこと、滞在歴に関係なく保護者の感じる言語的な障壁、また日仏の医療、教育、福祉、または子育てそのものの文化的相違から、実際の支援の利用に結び付きにくい存在であるということである。そのうえ、子どもの障害に関する専門的知識や支援を得ようとする際や、自身の子どもの状況を説明する際には、より高度で専門的な用語理解や言語表現が求められる。

そのため、在留邦人障害乳幼児の保護者への日本語による子育て情報、特に子どもの発達や障害、医療に関する最新で正確な情報の提供は、保護者の子育てを支えるために解決しなければならない必須の課題であった。さらに、日本人専門家とのつながりは、邦人保護者にとって同じ言語、文化の中で安心して相談ができるということのみならず、フランスで得た情報を確実に理解するために利用したり、逆に日本の発達支援の現状を知る機会となったり、と多様な役割を持つ存在であり、在留邦人の障害乳幼児を支援するうえでは欠かせない存在であった。同時に、保護者と同じ文化を持つ者同士の助け合い、情報交換等の縦、横のつながりは重要であり、そのような場と機会の提供は最重要課題の1つであった。

パリ在住邦人家庭の障害乳幼児親子の現状を把握しつつ、これらの課題を解決していくことを通して、彼らへの早期から継続した支援のための早急な土台作りが望まれる。

V. 今後の課題

本研究ではパリ在住邦人家庭の障害乳幼児の多様な子育て実態を明らか出来、彼らへの支援課題を抽出することができた。しかし対象者が6名と少数であったため、滞在歴、滞在のスタイル（ビザの種類、永住者と長期滞在者の区別

等）、子どもの障害種別などを考慮した分析までには至らなかった。また6名中3名が回顧調査となっていた点も今後の検討課題である。今後はより多くのデータを広く収集することで、パリに住む邦人家庭の障害乳幼児親子の子育てに関するデータを積み上げていくと同時に、データの個別性も追求していくことで、在留邦人家庭の障害乳幼児親子の子育てを早期からの継続した支援のための支援システムを構築していく必要がある。

文献

- 秋山剛 (1998) 異文化間メンタルヘルスの現在. *こころの科学*, 77, 14-22.
- バーンズ亀山静子・森真佐子 (2010) ニューヨークでの邦人子弟発達相談から. *心と文化*, 9 (1), 17-22.
- Bétrisey, C., Tetreault, S., Pierart, G., & Desmarais, C. (2015) Services de soutien utilisés par les parents migrants d'un enfant en situation de handicap. *La revue internationale de l'éducation familiale*, 38, 119-144.
- 外務省 (2019) 海外在留邦人数調査統計 統計表一覧 令和元年 (2019) 版 (平成30年10月1日現在). https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/page22_000043.html (2020年8月18日閲覧)
- 広瀬宏之 (2010) 海外邦人子弟の発達障害支援—ジャカルタにおける発達相談から. *心と文化*, 9 (1), 10-16.
- 広瀬宏之 (2013) 障害児が海外に行くとき (特集 グローバリゼーションの中の小児診療)—(海外に行く日本人の小児診療). *小児科診療*, 76 (6), 995-999.
- 一般社団法人在外企業協会 (2020) 「海外・帰国子女教育に関するアンケート」調査結果のお知らせ (2018年4月5日). https://www.joea.or.jp/wp-content/uploads/Survey_educationforJapanesechildrenoverseas_2019.pdf (2020年10月20日閲覧)
- 門松朋子 (2014) カナダBC州における発達障害児・者をもつ家族のための日系サポートグループ First Step について. *コミュニケーション障害学*, 31 (2), 120-124.
- Khanlou, N., Haque, N., Mustafa, N., Vazquez, M. V., Mantini, A., & Weiss, J. (2017) Access Barriers to

- Services by Immigrant Mothers of Children with Autism in Canada. *International Journal of Mental Health and Addiction*, 15, 239-259.
- 小野善郎 (2018) グローバル時代の子育て支援. 子育て支援と心理臨床, 15, 110-112.
- 佐藤郁哉 (2008) 質的データ分析法—原理・方法・実践—. 新曜社.
- 関久美子 (2018) NYすくすく会—海外育児支援グループの取組み. 子育て支援と心理臨床, 15, 113-118.
- Su, C., Khanlou, N., & Mustafa, N. (2018) Chinese immigrant mothers of children with developmental disabilities: Stressors and social support. *International Journal of Mental Health and Addiction*, <https://doi.org/10.1007/s11469-018-9882-z> (2020年10月20日閲覧)
- 諏訪美草・阿部美穂子・櫻木和子・松井智子 (2010) 海外在留邦人の子育て支援としての情報提供『Group Withの活動経験から』. *こころと文化*, 9 (1), 41-54.
- 田尻由起 (2014) フランスにおける日本人子女の発達を支援する試み. *コミュニケーション障害学*, 31 (2), 125-129.
- 武田真由美 (2007) A県における在日外国人の子育てニーズに関する探索的研究—在日外国人保護者, 行政担当者, 支援者へのインタビュー調査より—. *関西学院大学社会学部紀要*, 103, 115-127.
- 竹田希美子・嶋崎恵子・鈴木美代子・工藤公子 (2010) 海外の教育現場における発達障害の子どもたち—With Kidsへの相談事例から—. *心と文化*, 9 (1), 23-28.
- 滝坂信一 (2006) 外国に在住する日本人子女に対する教育相談支援. *世界の特殊教育*, 73-76.
- 鳥海順子 (2005) 米国ニューヨーク州周辺における邦人発達障害幼児への早期介入サービス. *山梨大学教育実践学研究*, 10, 87-94.
- 鳥海順子 (2013) 障害のある海外子女に対する邦人サポートグループの役割 (その1). *山梨大学教育実践学研究*, 18, 11-19.
- 坪井裕子 (2003) ロス・アンジェルスにおける日本語による障害児グループ活動. *名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要*, 50, 115-122.
- 2020.8.22 受稿、2020.12.16 受理 ——

An Exploratory Study on the Actual Conditions of Child-rearing and Support Issues for Japanese Parents and Children with Disabilities Living in Paris.

Yuki TAJIRI* and Masayoshi TSUGE**

The purpose of this study was to clarify the actual conditions of child-rearing and support issues for parents of children with disabilities in Japanese families living in Paris. Semi-structured interviews were conducted with mothers of six Japanese families. Analysis of the interview contents suggested four factors: [Positive perception of parenting in France], [Anxiety, embarrassment, and anxiety about raising children in France], [Restrictions on the collection and use of information due to linguistic and cultural barriers], [Parenting support needs]. The mothers were anxious and confused about their social resources regarding parenting, even though they viewed raising children in Paris in a positive light. Among the parenting support needs identified were "linguistic support", "information provision regarding medical care and parenting in Japan", and "access to Japanese experts on child development". In particular, the weakness of support due to "Japanese living in a foreign country" amplifies the difficulty of raising children. Therefore, providing a place and opportunity for Japanese to connect with each other is an important issue. In the future, it will be necessary to disseminate information on child-rearing and to create a system that supports child-rearing in collaboration with Japanese-affiliated organizations.

Key words: japanese families living abroad, child-raising support, family support, infants and children with disabilities, mental health

* Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba

** Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba